

令和2年度 第3回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日 時：令和3年3月24日（水）18：00～19：30

場 所：川崎市教育文化会館3階 第6・7会議室

出席者：藤原委員、内田委員、吉田委員、根岸委員、宮越委員、館委員、永野委員、高井委員、
稲葉委員、前島委員

（事務局）小田嶋教育長、石井教育次長、田中教育政策室長、森学校教育部長、
星野学校教育部担当部長、市川総合教育センター所長、
二瓶教育政策室企画調整担当課長、添野教育政策室政策推進担当課長、
栃木総合教育センター情報・視聴覚センター室長ほか

欠席者：高木委員、佐藤委員

傍聴者：なし

司 会：二瓶教育政策室企画調整担当課長

[配布資料]

資料1：川崎市教育改革推進会議運営要綱

資料2：川崎市教育改革推進会議委員名簿

資料3：次期教育プランの改定について

参考資料1：令和3年度川崎市予算について

参考資料2：【摘録】令和2年度第2回川崎市教育改革推進会議

[次第]

- 1 開会
- 2 教育委員会あいさつ（教育長）
- 3 議題
次期教育プランの改定について

・・・資料3

議題 次期教育プランの改定について

藤原委員：時代が急激に変わりつつある社会状況においては、教育行政を進める上で、様々な方々の御意見というのをいただきながら、これまでの常識というものを見直し、動いていく必要があると思う。そういう意味で、今日、皆さん方から多様な御意見をいただくことは非常に貴重な場であると考えている。例えば、教育プランの策定や基本目標というのは10年間変わらないが、4年間を見据えて、注視すべき点や期待したいこと、あるいは2年間議論する中で気になった点などについて御自由に御意見をいただければと考えている。

永野委員：川崎の中学校でGIGAスクール構想がどのように進むか大変関心を持っている。全国一斉に始まるのはどうかと思っていたが、川崎市では、この2月、3月でどんどん学校の環境整備が進んでおり、そのスピードの速さに驚いている。本当に間に合うのか心配しながら見てい

たが、工事も予定どおりに進んでいる。私たちの中学校では、無線LANの工事が12月、1月から始まったが、3月に終えた。

また、配布されるタブレット端末についても、小学校では早いところで12月ぐらいから配っていたところもあると思うが、中学校でも3月現在もうほぼ配り終わり、教員が実際に端末を手にしながら研修を進め、4月に備えていくような状態になってきている。

環境整備が進む中で、いよいよ子どもたちの学習に生きる形で、私たち教職員がしっかりと研修を受けて、次年度につなげていきたいと思っている。

藤原委員：急ピッチで進められている中で、例えば教育委員会として手だてを打つことで現場が助かることもあると思う。今、現場で困っていることはあるか。

永野委員：1月、2月、3月に教員研修の機会を設けたが、まだまだ不十分な面がある。学校の中で、GIGAスクール構想推進教師が研修を行っている。私の学校でも年度末に2回ほど研修を行い、それを広めているところだが、まだまだ端末を手にしながら覚えていく時間が必要だと感じている。4月からすぐに授業が始まるため、時間が少し欲しいと感じているところ。

吉田委員：キャリア在り方生き方教育の指針を川崎市は特に強調しているとの報告を何度かお聞きした。予算についても、大分苦しい現状の中でも増やしていつているようだが、キャリア在り方教育推進の予算は、ほかに比べると少し少ないと感じる。この部分についてもう少し予算をやりくりできなかったのかと全体的な数字を見た印象として感じた。

もう一つは、それに関連して、子どもの学びの部分の中で、学習の個性化というところについて、一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む体制について大変興味がある分野である。この部分についての指標がないことに疑問を感じている。一人ひとりの個性とか、それに応じた学習活動というのは、何らかの指標みたいなものがあつた上でのことと思う。また、主体的、多様的で深い学びというのは、非常に直接的に連動するように感じている。

また、キャリア在り方生き方に関連して、コロナがあり中止になってしまったが、SDGsの講師を引き受ける機会があつた。川崎市は指定都市にもかかわらず、SDGs的な文字が一つもない。それに関わることが内容的には書いてあるが、教職員の方々が研修を受けることが必要だと感じる。もう少し総合学習の中にSDGsの理解を深められるような機会をつくることが必要だと感じた。

藤原委員：キャリア教育を川崎市が今後も重視するならば、どのように夢を持ちながら自分らしく生きていく子どもを育てるのかという方法論の核が総合的な学習の時間だというふうにする。それについてもっと工夫してSDGsの観点を取り入れることが必要との提案に考えさせられるところがあつた。

その割には予算が少ないという意見だが、キャリア教育について重視するという姿が予算の数値には見えないという指摘だが、これについて事務局から意見はあるか。

田中教育政策室長：キャリア教育に関しては、学校でキャリア教育の時間というような教科や領

域があるわけではない。社会科や総合的な学習の時間など、様々な時間を駆使しながら、子どもたちに生き方の軸をつくる授業を行っている。そのため、様々な授業の中に予算が溶け込んでおり、この予算措置に表れてきているのは、あくまでもキャリアパスポートにかかる印刷の予算などの予算のみである。予算額だけでは一概に見えない部分があると思う。キャリア在り方生き方教育を進めたことで、子どもたちにも自尊心の高まりというところで10ポイント程高まっており、目に見えた効果が出ている。

また、先日、よみうりランドで修学旅行の代替行事を行ったが、子どもたちからたくさんお手紙をいただき、川崎が大好きですというような言葉もいただいております、キャリア教育の柱の一つでもある、「わたしたちのまち川崎」という、地域の意識を育てていくということについて、様々な面で効果は出てきていると実感している。必要な予算はもちろん今後も確保し、キャリア教育を進めていきたいと思っている。

さらに、SDGsについては、ここのところ川崎市でも重点的に取り組んでおり、次回の第3期実施計画には文字としてきちんと入れていきたいと思っている。教育委員会のほうでも積極的に学校のほうにSDGsを生かした教育をしていただけるように周知しており、先日も国のSDGsの特別賞を川崎市立平間小学校が受賞した。

川崎市でもSDGsに取り組む団体や学校を対象として、認証制度を設けており、今20~30校の応募が来ているところ。今後も積極的に取り組んでいきたいと思っている。

藤原委員：総合的な学習の時間というのは素晴らしい発明だったと私は思っている。社会に一番近い学習方法である。教科というのは大人が整理した学習の体系であるため、効率的ではあるが子どもからすると、あるいは普通の大人の生活からするとちょっと特殊な学び方ではある。ところが、総合的な学習の時間は総合的に正に学習していくため、これから先ますます大事になってくるのではないかと思う。

宮越委員：寺子屋や子ども会議に関わっており子どもたちと接触する機会が多い。年度の終わりということでこの間、寺子屋の修了式があった。子どもたちからサインをもらったり、求められたりする中で、子どもたちとの距離感が縮まるなど取り組むのが楽しい。寺子屋先生で地域の人たちが毎回欠かさず、うれしそうに来て、子どもたちもその中で力をもらうなど、ほっとするような場所となっている。非常に私は寺子屋事業が素晴らしいと感じている。誰でも、そこに大人が優しいまなざしで居るだけで子どもたちを支援できるというのは、教育のイノベーションではないかと普段から感じている。

社会の教育力を上げることが私は大きな意味があると思う。社会に参加する様々な機会があることによって、子ども自身が元気になる。子どもの権利条例をつくっている川崎は、子どもが社会のパートナーであると言っている。

また、市民の参画率が上がることで、私は何よりも社会の教育力が上がることになると思う。高齢者が寺子屋の中で教育に参画することで、高揚感や生きがいを感じている。そういう意味で、社会教育をもう少し組織的に教育事業の一翼として、学校教育と相対的に違った教育分野として扱ってほしい。

また、キャリア在り方生き方教育にも関わる総合的な学習等について、あまり語られてこない。

このペーパーを見ると少し存在感が薄い。家庭や地域との連携が様々なところに書いてあるが、連携する対象をきちんと育てることを教育委員会の仕事として今後考えてほしい。

今日は参考までに私たち地域教育会議の新しく作ったパンフレットを持ってきた。文部科学省が学校地域協働本部構想を打ち出したが、私たちは既に地域教育会議でほとんど実施している。新しい体系として地域教育コーディネーターを設置することも行っているが、社会教育やPTAもそうだが、家庭教育についても総合的な教育力をレベルアップしていくような視点を持ってもらえると私たちのやりがいが出てくると感じる。

藤原委員：参加というキーワードはすごく大事だと思う。参加しながら、関わりながら社会を変えていく力というのをこれからつけていくことが大事。川崎市というのは、子どもの参加というキーワードというのを大事にしており、取り組んできた話の一つだと受け止めている。

そのような立場で子どもの参加、子どもの保護だけでなく、主体として扱い、共に学んでいく、そのような観点で社会教育を今まで進めてきて、この4年間の実施計画にどのようなものに乗せたら、さらにそれが川崎市全体に波及するとか、今どういうところを課題として感じているかである。

宮越委員：子どもの権利条例や地域教育会議は、衝撃的な事件をきっかけに学校教育だけでは子どもを育てられないということから、地域の力を借りようということで地域教育会議が始まった。これは文部科学省も含めて審議されたことだと聞いているが、丁寧に立ち上げている。

子どもの権利条例も、立ち上げについてはすごく丁寧に行っている。スタートはよかったが、その後、市民ボランティアに預けてしまっている。子どもの権利条例は、学校の先生も子どもたちに頻りに声をかけながら、色々な子どもの意見が活性化するように行政が全面的にバックアップしたが、それが後退しており、取り残された市民が今、四苦八苦している。

必要な教育事業として組織的に位置づけて、予算や人材などがしっかりリンクした体制をつくっていくことが必要だと感じる。学校と地域の協働についても同じ課題がある。立派な理念でも、それを実際に持続的に実行していくにはどうしたらいいか、持続性を保障するような体制づくりが必要だと感じている。ただ、注文するばかりでなく、市民も頑張る必要があるとも考えている。

内田委員：私も今の宮越委員のお話と少し近いところで意見を持っていた。例えば川崎は様々な組織が既にあり、とても先進的な取組がされているため、例えば社会的自立に必要な能力・態度と共生・協働の精神の育成というところにどのように取り組んでいくのかというところで、宮越委員のお話とも関連して、そのような場を社会教育の中だけではなく、学校教育とも融合させていく必要があるのではないかと考えた。その時に、子ども会議をもう少し拡充していくというようなことが書き込まれていくとよいのではないかと思う。例えば、学校施設の環境整備のところでは学校トイレの改修というところがあるが、こういったところでもう少し子どもたちの意見を聞いてみたり、その意見が実際に反映されることで、自分たちの意見でこのように学校の環境を改善することができる感じる、そういうことの積み重ねが自主自立であったり、自己肯定感とか役割感とか、そういうところにつながっていくと考える。本当に川崎は子どもの参加ということをととても大事にして教育してきたと思う。その特徴を、もっと強調してもいいと思う。

その関連で行くと、子どもの権利条例はぜひ書き込み、文字に残すことがとても重要だと思う。自主自立、共生協働の場づくりとか、そういった機会を保障するところで、様々なところで子どもの意見を取り入れて反映させていくものがたくさん散りばめられてあると思う。それらを、川崎は大事にするということをもっと、様々なところに散らばっているものをまとめて打ち出してみてもいいのではないかなと思いながら見ていた。子どもが主体となって活動できる場や機会は、既にあるものもあるため、そういったものを活性化する等、子ども会議等にテコ入れしてみてもどうかと思う。

川崎の特徴をもっと前面に押し出すことで、一番の核にしていると言われているキャリア在り方生き方教育の推進というところに直結すると思うため、ぜひ子どもが実際に参加する場をもっと活性化させることをこうしたプランの中に載せていく、又は、川崎の子どもの権利条例ということで、全て串刺しにしていくとよいのではないかなと思った。

館委員：教育プランを否定するつもりはないが、やはりもう少し具体的な目指す姿というのを考えるといいのではないかと全体を通して思った。もちろん、かわさき教育プランの基本理念、目標として「夢や希望を抱いて生きがいのある」というのは大事だと思うが、それを大事にした先に、我々は子どもたちに何を期待しているのかということについて、もう少しみんなで話してもいいのではないかなと思った。我々よりも子どもたちはもっと長い人生を生きていく。当然、我々のほうが先にいなくなると思うが、その子どもたちが将来、川崎には残らないかもしれないが、結構な子どもが川崎に残るといえるときに、その子どもたちに、例えば地元に残った子どもたちが川崎というまちをどういうまちにしていってほしいのか。少し一方的な思いになっても私はいいと思うが、もう少し夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送った先に、子どもたちに対しての思いや、願いを具体化してもいいのではないかなと私は思う。それがないと、ここに書かれていることは、結局全てが大事という言葉で結局どれも総花的というか、読んでいても、みんな大事だからやろうというようなことになる。これは結局、リソースを割いて仕事をしていく中で、どれもこれも大事だからという話になってしまうと、この先の川崎は結局どんなまちになるのかわからない。青写真も何も書けないプランになっていないかというように思う。

そのため、子どもたちが将来、川崎のまちをこうして欲しいというような、そんな願いみたいなものをみんなで話し合ってもいいのかなと思う。

結局、今の社会的な課題というのは、例えば子どもの貧困の問題等、かなり多岐にわたっていると思う。先ほども基本理念として、夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築くというところを実現して、川崎に住んでいる全ての子どもたちが、一言で言うなら幸せな人生を送っていった先に、川崎のまちと云ったら、それこそ言葉で言ったら多様性が認められているような社会、一言で言えば、そのような社会なのかと、ぼんやりと思う。つまり貧困、経済的な差とか、学歴の差という言い方も少し表現はよくないかもしれないが、様々な生き方をしてきた人が一堂に介したまちではあるものの、みんながみんな、自分は幸せだというふうに思えるまちというところを、恐らく究極の目標として、川崎というところは目指したいのではないかなと思う。しかし、現実的な子どもの貧困といったところで、やはり苦勞している御家庭がある。また、現実的に例えばDVだとかパワハラみたいな、社会的、家庭的な問題というものもある。そういうところは別途解決していかないといけない課題としてあると思う。その課題と、結局、今の教育と

いうところが具体的にどのようにリンクしているかというところが見えてこないため、幸せを目指していく、全市的な幸せを目指していくというまちの中での課題は何だろうというところを、もう少し深掘りすることで、一つ一つのアクションが具体的にリンクするような流れに持っていけないかというふうに思う。ここでいきなりは難しいと思うが、もう少しその辺を話し合えればと思った。

あまりにも個にフォーカスし過ぎると、個人だけの幸せみたいな、そういうところばかりが大事にされがちかもしれないが、我々は実際1人で生きている人はいないはずで、そうすると社会というか、お互いの関係性の中で自分がいかに幸せな人生を送っていくかというところを川崎のまちとしてどう具体化していくかというところを、何か青写真でもいいので、書けるといいと感じた。

根岸委員：GIGAスクールの整備が急ピッチで進み、本当に素晴らしいと思った。子どもも整備が進んでいることは十分理解しており、パソコンを自分が1人1台持てるということをうれしがりつつ、不安もある。「僕はこれをちゃんと壊さないで使いこなせるか」という不安感を今持っている。4月からスタートする中で、子どもがどのように使っていくのかについて、私も期待しつつ、不安もありつつ、いい方向に学習の向上につながっていけるような使い方になってくればという期待を持っている。

以前お話があったと思うが、教員の先生方の研修が不十分というお話もあったが、システムのサポート、不具合があったときにすぐにサポートできるような体制をつくってほしいというお話もあったが、実際にサポートして教育に不具合が出ないようにしてほしいと思っている。

キャリアの話も子どもの自己肯定感が結構低く川崎市は出ていたように記憶しているが、そこに対して、上げるためにどういうプランがあるのかというのは、少し気になっている。今度また改正があるようなので、具体的にどのように自己肯定感を上げるのかを明言できるといいと思う。

内田委員から話があったが、子どもから学校のトイレをこういうふうに改修したいという話が出て、それが現実にもしなれば、自己肯定感が上がることにつながるだろうと思った。具体的なことで子どもの自己肯定感が本当に上がるように計画していただけるとありがたいと思う。

また、コロナになり、今年はあまり学校も活動が少なかったが、結構オンラインでの勉強会を子どもが持ってきてくれたので、私もそれで何個か、オンラインで参加した。私はとても参加しやすかったため、今後も続けてほしいと思う。また、もっと様々なものをオンライン化し、仕事がありその時間に行くというのはなかなか難しい人でも、親とか地域の人が参加できるような講座をたくさんつくっていただけるとありがたいと思う。

また、教職員の負担軽減のお話があったが、今年に入り、留守番電話や、夏休みにお休みを完全にとるという形で、先生方の負担を少なくするような配慮がされていたと思うが、実際どの程度、先生方の負担が減ったのかというのが少し気になっている。この場でも、先生方の負担を減らすためにサポーターみたいな方を雇う等、そういったお話が出ていたと思うが、そういったものが実際に実現したのか、今後そういう取組をする予定があるのか気になる。あと、先生方のストレスチェックとかの内容で、取組をされて軽減が見られたのか、その辺を少し知りたいと思う。

田中教育政策室長：代表的なもののみ御紹介すると、事務に関しては教職員事務支援員という形

で、本来であれば来年度までかけて全校に拡充する予定だったものを、コロナの関係もあり、今年度の途中で一応全校にということで配置を進めており、人材的に入りきれたかどうかは分からないがほとんどの学校に配置できていると思う。

また、中学校では部活のほうもかなり負担になっていると聞いており、部活動の指導員については、今年は半分の学校に配置が終わり、来年度で全部の学校に広げていくというところで、予算も確保している。

大きなところだと、留守番電話も小学校、中学校まで広げ、また、夏休み中の学校閉庁日という形で、誰も学校に来ない日というのも全ての学校で実施している。

概ね文部科学省がこれを行ったほうが良いというメニューについては大体、川崎市でも全て手がついたかと思う。あと、学校の先生はある意味、すごく真面目で、時間があればあるだけ働いてしまう方が多い。本来業務に専念していただいて、質の高い授業をやって子どもが喜べば当然モチベーションも上がるので、そこはすごく大事に教育委員会でも考えている。ただ、そうはいうものの月に80時間以上の残業されてしまうと、やはり体の調子を崩してしまうので、そのバランスを取っていただきながら、働き方改革を進めていきたいと思っている。

根岸委員：コロナ禍で机とかのアルコール消毒を今もしていると思うが、その辺の先生方の御負担については何かしているか。

田中教育政策室長：当初は、特に小学校で、子どもが帰った後に子どもの机や床など全部消毒していたような学校もあり心配だったが、科学的な根拠のあるエビデンスが示されたところだけでいいということで、ドアノブ等、みんなが触るものだけでいいということを夏休みぐらいに発出し、大分楽になったという声は聞いているが、やはり今まではやっていなかったことなので、一定の負担は生じてしまっている状況ではあるが、その時間だけ委託するというのはなかなか受け手もないため、いい方法が今見つからない状況ではある。

二瓶教育政策室担当課長：以前、佐藤委員のいる小杉小学校に伺ったところ、学校の校門にボランティア募集という紙が貼ってあった。ボランティアとは何だろうと学校に聞いてみたら、消毒するためのボランティアさんがいらっしやっていて、学校のお手伝いをさせていただいているという話を聞いた。そういった負担軽減もあった。それ以外にも、例えば校用スマホ、学校に今まで2回線しかなかったものを、スマートフォンを今年度配備する等の取組もしている。来年度、4月からホームページも、当然保護者の方が見やすいようにというのものもあるが、コンテンツ・マネジメント・システムを導入し、学校の中で更新しやすいような取組を進めた。総合的に学校の負担軽減が図れるような、あと情報が早く伝わるような形で取り組んでいるところ。

根岸委員：今年1年はコロナであまり学校に行けなかった。学校の様子はほとんどお手紙でしか分からない。あと、子どものことしか分からなかったため、どのように学校教育が進んでいるのかと心配しつつ見ていた感じだったが、安心した。また、今年はことごとく行事がつぶれてしまい、5年生の子どもがいるが、結局、遠足も2月に計画していたのが緊急事態宣言でなくなり、子どもも残念だった。また、先生方のモチベーションが下がらなかったかということに気にして

いた。来年どうなるか分からないが、先生たちのメンタルケアも含め、教育委員会からのサポートがあればと思う。

藤原委員：教師の働き方というのも非常に大事で、来年度1年かけて議論される第3期の実施計画の中でも、非常に大きな柱になってくるだろうと思う。そのため、教員の成り手というのが減ってきている中で、どのような働き方を目指していくのかを、新しい働き方というものを、ぜひ提案してほしいと思う。

高井委員：働き方改革という点から少し話していきたいと思う。コロナの状況があり、私は高校のため、学区が広いということもあり、生徒の安全を図るということで、時差登校を現在もしているところ。そうしたところ、先生たちから朝の準備がしっかりできて、ミーティングをした後に教室に行けて授業ができるという声が上がっている。確かに言われるとおり、勤務時間と営業開始時間が同じところは、お客様を迎える商店や銀行ではあり得ない話ではあるが、学校というのは、そこがほぼ同じ時間帯で設定されているため、現実的には何が生じていたかという、勤務時間より相当前の時間に来て、それなりの準備をした上でお客様である、児童・生徒を迎えるということが通常であった。コロナでそのサイクルが変わったことで、教員がこれだとやりやすいと気づいた。緊急事態宣言が解除されても、このままで行けないかという相談もあったが、授業時間を確保しないといけないからということで、狭間があるというふうに感じている。一方で、部活動も相当な制限を受けることになり、子どもたちが活動できない中でストレスを感じていることは、子どもの話を聞くところでは如実に出てきている。一方で、教員側としては、週末とはこういうものなのかといった意見も出てきている。基本的に週末がない生活を何十年も続けてきたような人もいる。

ただ、デメリットばかりではなく、コロナによって割と自分たちの働き方を、客観的に見る機会になったと思っている。これが当然続くわけではないが、自分たちのライフサイクルを少し、業務との関わりの中で見詰め直す機会にできればと思っている。

また、卒業後次の学校に進むかどうかは子どもたちの判断による。就職や専門学校、4年制や短大へ行くという選択肢があり、そこは子どもたちの判断になるが、一つの視点としては、特別支援に関わる子どもたちというよりは、いわゆる一般的に言われるグレーゾーンと言われるような形で、進学や就労が将来困難を伴うであろうという子どもたちの関わりが、高等学校の卒業時点で一度、教育の視点からは切れるということがある。そんなところで、昨今言われている貧困の連鎖や若者の貧困、それからひきこもりの問題等があり、学校で子どもたちを指導、支援している間に福祉的な視点と連携が図れるような、学校が生徒たちの将来の自立または支援への接続ができるようなプラットフォームとしての視点も必要だと思う。それぞれの学校で取り組んでいるが、システム化して健康福祉局との連携を図ることで、子どもたちのいわゆるひきこもり問題は少し解決、もしくは支援の手が伸びるのではないかと思う。

藤原委員：文部科学省の職員としての立場を離れての意見だが、これから先、カリキュラムというのを、いかに小さく教えて大きく育てることができないかというのを私は考えている。学校で教える時間というのをいかに減らし、効果を上げるようなカリキュラム、教育方法がないかを考

えている。これは決してディスカッションとしては夢ではなく、シンガポールとかはそういう発想をしている。小さく教えて大きく育てるというコンセプトのカリキュラムコードになっている。そんなことも考えながら、コロナを契機に、そんな発想でカリキュラムというのを、先生の働き方を見直す余地はないかと研究者としてそんなことに思いをはせながら考えている。

稲葉委員：特別支援学校について、少し細かい話になるが、基本施策3のところ、感想を含めて話したい。前のプランをつくったときに、基本施策3のところに関わったが、当時の川崎では支援教育という概念をここで整理して、様々なことを作り、決めてきたわけだが、その大きな柱の一つがコーディネーターの専任化事業だった。教育委員会の中でもかなりの熱量をもって、このことを進めてきて、小学校では全校に配置が終わり、中学校にも今、非常勤を入れていくことで進めている。当然、様々な成果もあったと思うが、当初、様々な理想として描いていたようなコーディネーターの専任化による様々な効果については、必ずしもうまくいっていないこともあるのではないかとというのが正直なところ。やはり、次のことを考えていく上では、この辺りのことの振り返りというのはどうしても必要だと感じる。

もう一つは、従来言われているように、先行きが非常に不透明で、どのような世の中になっていくのかということが言われており、次のプランをつくり、次のプランの10年が終わる、つまり15年先ぐらいのことを考えたときに、今の義務教育を含め様々な、想像できない変化が起きると思う。もしかしたらそれ以上に、特別支援学校や通級など特別支援に関わる教育はもっと先行きが不透明で読めないのではないかと感じる。相当知恵を絞らないと、次の15年先ぐらいの姿を見極めて必要なことを決めていくのは難しいと思う。また、これと連動している特別支援教育推進計画も、2年間程度の期間で前回も行ったが、とてもできないだろうと思う。

この基本施策3の対象に関わる子どもたちは、支援教育だけでなく外国籍の子ども等も含めて、益々増えてきている。増えてきているとはいっても、現状は定型発達の子のほうが大部分のため、基本政策3をどうするかということは、大部分である。ここには当てはまらない子どもたちの教育の形をどうするかということの裏返しでもあると感じている。対象者がどんどん増えていく一方で、それに対する対応にどうしても力を入れていくわけだが、その先にどういう結果が待っているのかといったところを見通す力が自分にはないと思いながら考えていた。

藤原委員：特別支援については、これからの川崎の未来を考えるには当然大事だと考える。社会づくりにおいても、本人にとっても大事であり、それについて15年後を見据えながら、考えてほしいと思う。

前島委員：働き方改革と、GIGA、子ども会議についての3点について話したい。

まず、働き方改革について、留守番電話の設置や事務支援員の配置等、現場の働き方について考えていただき本当に感謝している。しかし、先ほどのお話にもあったように、教員は本当に真面目な人が多く、時間があれば時間があつた分、教材研究してしまうため、事務支援員さんが入り、少し今までやっていた分が減っても、その分を授業の準備などに使ってしまう、より丁寧というように、どんどん進め、さらに帰るのが遅くなっている人も現状いる。

人によって違うが、ありがたいということで早く帰れる方もいれば、自分たちの意識を変え、

働き方を変え、早く帰り、自分たちも元気でいないと子どもたちのためにならないという意識もある中で、どうしても子どもたちのためにと準備してしまい、さらに勤務時間が長くなっているところは、課題だと感じている。その中で、先ほどカリキュラムの見直しという話があったが、それが叶えばと個人的には思っている。かわさき教育プランの中にあるキャリア在り方生き方教育や、共生＊教育プログラム等、学校現場で大事にし、これまで自分も実践してきた。しかし、指導要領があるため、それに沿って時間数もしっかり確保しなければならない。何を大事にすべきかということが現場の先生の声かと思う。今後、そういうところもクリアしながら、多面的に見ていきながら、子どもたちのためによい環境で働くことができるようになればいいと感じている。

G I G Aスクールについて紹介だが、コロナ禍において、どうしても妊娠されている先生は勤務が難しいということで、在宅勤務という方が何人かいる。その中で、G I G Aスクールでパソコンが入ったことによって、すぐにはできないかもしれないが、家にいてもお休みに入るまでは在宅で子どもたちとつながり、子どもと一緒に授業ができるというように喜んでいた先生がいた。こういうところでもG I G Aスクールは生きているというふうに感じたところを、自分の中では素敵な話だと思ったので、紹介する。

川崎市の子ども会議には、私は事務局として関わっている。新型コロナウイルスの流行によりまずスタートできず、やっと2か月遅れでスタートした。その中で子どもたちが第一に言っていたことは、みんなに会えてうれしいと。やはり会うことは大事だということから、今年度の活動がスタートした。学校の中では見せないような表情や発言を知ることができた。学校ではあまり発言しない子どもも、子ども会議の中では自分の意見をしっかり伝えていたり、友達と関わるのが少し苦手と言いながらも慣れた子たちが、子ども会議の中では一緒に遊んだり、活動したり、様々な子どもたちの姿があるというのを、この立場になって学んだ。

学校の中だけで見ていた子どもたちではない、違った部分の子どもたちが、こういったところに関わることで、様々なところから、どのような出来事があったかや、様々なことを学ぶことができた。

先ほど、永野先生の研修の時間のお話もあったが、私たち教員は研修していくべきであり、研究していくべきだ。子どもたちのためにというところをすごく感じているが、やはりどうしても時間がなく難しい。出口のないループにはまっている感じはしている。こういう場で皆さんと意見を交換することで、よりよく子どもたちのために何かできることが一つでも多く見つかっていけばと感じている。

以下、事務連絡

〈閉会〉